

6-1次調査時にはこの地点で竪穴住居など遺構埋土を掘削しているとの認識はなかったのだが、この土器がほぼ完形に復元できることなどから、遺構出土品であれば住居7や住居8と関係する可能性もある。(4)は布留0式期ないしは布留1式期に併行するとみられるので、定かではないが、住居7または住居8のいずれかの住居の形成時期は、当該期に求められるかもしれない。

土坑1(図6) 土坑1は、調査区北西端付近で検出した。検出長径56cm、短径44cm、深さ13cmで、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝13と切り合い関係があり、素掘溝13に切られている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が9片出土した。

土坑2(図6) 土坑2は、調査区西半で検出した。検出長径1.3m、短径38cm、深さ41cmで、平面は不整楕円形を呈する。土坑1と同様に素掘溝13に切られている。埋土は黒灰褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片と須恵器の細片が遺物袋(35cm×25cm)で1袋分出土した。

土坑3(図6) 土坑3は、調査区西半で検出した。検出長径62cm、短径58cm、深さ17cmで、平面は楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂礫土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が14片出土した。

土坑4(図6) 土坑4は、調査区西半の北壁付近で検出した。既述のように第6-1次調査第2トレンチの掘削時に遺構の大半を欠損した。検出部分から長径160cm以上、短径158cm、深さ11cm以上の平面楕円形に復元できる。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代の土師器の小片が遺物袋(35cm×25cm)で1袋分出土した。

土坑5(図6) 土坑5は、調査区中央付近で検出した。検出長径64cm、短径58cm、深さ25cmで、平面は楕円形を呈する。素掘溝37と切り合い関係があり、素掘溝37に切られている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は、須恵器の細片1片、土師器の細片13片のほか、(図21-41)として掲げた須恵器把手付無蓋高坏片が出土した。この土器がTK23型式併行期に比定できることから、土坑5の形成時期は当該期に求められる。

土坑6(図6) 土坑6は、調査区中央付近で検出した。検出長径90cm、短径86cm、深さ50cmで、平面が楕円形を呈する。溝101と切り合い関係があり、溝101を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が27片出土した。

土坑7(図6) 土坑7は、調査区西半の南壁付近で検出した。南半部分が調査区外に出る。既述のように第6-1次調査第1トレンチの掘削によって遺構の大半を欠損したが、検出部分から1辺4.3mの平面方形の土坑に復元できる。深さは8cmとやや浅い。埋土は黒褐色砂礫土である。遺物は古墳時代の土師器と須恵器の細片が遺物袋(35cm×25cm)で2袋分出土したほか、(図21-42)として掲げた土師器二重口縁壺片が出土した。(42)は庄内式期から布留0式期にみられる土器である。

土坑8(図7) 土坑8は、調査区中央で検出した。検出長径77cm、短径62cm、深さ6cmで、平

面は楕円形を呈する。素掘溝 37 と切り合い関係があり、この溝に切られている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。しかし、土坑 8 の形成時期は、その埋土が古墳時代の遺物が出土した土坑 6 などと共通していることから、土坑 6 などと同様に古墳時代に求められよう。

土坑 9 (図 7) 土坑 9 は、調査区東半で検出した。検出長径約 1.3 m、短径 93 cm、深さ 23 cm で、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝 36 及び住居 5 と切り合い関係があり、素掘溝 36 に切られる一方で、住居 5 の北西隅を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。しかし、土坑 9 の形成時期は埋土の共通から土坑 6 などと同様の古墳時代に求められよう。

土坑 10 (図 7) 土坑 10 は、調査区東半で検出した。検出長径 82 cm、短径 78 cm、深さ 32 cm で、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝 46・47 及び住居 2 と切り合い関係があり、素掘溝 46 に切られる一方で、住居 2 の北西隅を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。しかし、土坑 10 の形成時期は埋土の共通から土坑 6 などと同様の古墳時代に求められよう。

土坑 11 (図 7) 土坑 11 は、調査区東半の北壁付近で検出した。検出長径 60 cm、短径 50 cm、深さ 35 cm で、平面は楕円形を呈する。素掘溝 57 及び溝 100 と切り合い関係があり、いずれの溝にも切られている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が 7 片出土した。

土坑 12 (図 7) 土坑 12 は、住居 9 の北西隅部付近で検出した。検出長径 1 m、短径 95 cm、深さ 40 cm で、平面は楕円形を呈する。素掘溝 56 と切り合い関係があり、素掘溝 56 に切られている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が 65 片出土した。

土坑 13 (図 7) 土坑 13 は、調査区東半で検出した。検出長径約 1.2 m、短径約 1.1 m、深さ 36 cm で、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝 63・64 及び溝 102 と切り合い関係があり、素掘溝 63・64 に切られる一方で、溝 102 を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が 52 片、サヌカイトの剥片が 1 点出土した。

土坑 14 (図 7) 土坑 14 は、調査区東半で検出した。検出長径 1.5 m、短径約 1.1 m、深さ 37 cm で、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝 56・66 及び住居 9 と切り合い関係があり、素掘溝 56・66 に切られる一方で、住居 9 の東辺中央付近を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が 81 片出土した。

土坑 15 (図 7) 土坑 15 は、調査区東半で検出した。検出長径 74 cm、短径 62 cm、深さ 52 cm で、平面は楕円形を呈する。素掘溝 64 と切り合い関係があり、素掘溝 64 に切られている。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。しかし、土坑 15 の形成時期は、その埋土が他の土坑埋土と共通していないが、住居 5 の主柱穴などのピットと共通していることから、住居 5 などと同様に古墳時代に求められよう。

土坑 16 (図 7) 土坑 16 は、調査区東半で検出した。検出長径 1.5 m、短径約 1.2 m、深さ 21 cm で、平面は不整楕円形を呈する。素掘溝 46・47 及び住居 7 と切り合い関係があり、素掘溝 46・47 に切られる一方で、住居 7 の北隅部を切っている。埋土は淡灰褐色砂質土である。遺物は古墳時代とみ

られる土師器の細片 24 片と須恵器の細片 2 片が出土した。

土坑 17 (図 7) 土坑 17 は、調査区東半の南壁付近で検出した。検出長径約 2.8 m、短径 1.3 m、深さ 32cm で、平面は不整楕円形を呈する。ビット 150・151 及びビット 189 と切り合い関係があり、ビット 150・151 に切られる一方で、ビット 189 を切っている。埋土は黒褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。しかし、土坑 17 の形成時期は埋土の共通から土坑 6 などと同様の古墳時代に求められよう。

土坑 18 (図 7) 土坑 18 は、調査区東端付近で検出した。「第 3 章第 1 節 基本層序と田地形」で述べた、水田耕作のために造成された地点に当たる。検出長径 81cm、短径 73cm、深さ 17cm の平面楕円形の土坑で、埋土に炭化物と焼土が混在するいわゆる焼土坑である。また、特に注意することとして、この土坑の周囲にビット 160・161・162・163 などの 10 基程度のビットが検出された。この地点が先述の水田造成時に削平されていたと考え、ここにも本来は竪穴住居などの遺構が存在した可能性がある。その場合には、土坑 18 はそれらのビットと共に住居を構成する遺構となり、炉であった可能性も考えられよう。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片が 13 片出土した。

溝 101 (図 3) 溝 101 は、調査区のほぼ中央で検出した。検出長約 20 m、幅 40cm～65cm、深さ 12cm～27cm で、北東方向に延びる溝である。素掘溝 35～37・45・46・53～55、土坑 6 と切り合い関係があり、それらに切られている。埋土は暗灰褐色砂礫土で 1 層のみが認められた。遺物は古墳時代とみられる土師器の細片と須恵器の細片が遺物袋 (35cm×25cm) で 1 袋分出土した。

溝 102 (図 14) 溝 102 は、調査区北壁付近で検出した。検出長約 3 m、幅 30cm、深さ 7cm～9cm で、東西方向に延びる溝である。素掘溝 57・62、住居 9、土坑 13 と切り合い関係があり、素掘溝 57・62 と土坑 13 に切られる一方で、住居 9 の北辺を切っている。埋土は黒色砂礫土で 1 層のみが認められた。遺物は古墳時代の土師器の細片 1 片と須恵器の壺片 1 片 (図 21-43) が出土した。

溝 103 (図 14) 溝 103 は、溝 102 から南に約 1 m の位置で検出した。検出長約 18 m、幅 35cm～50cm、深さ 8cm～22cm の東西方向に延びる溝である。素掘溝 45・46・55・56・60～62、溝 100、住居 2・9 と切り合い関係があり、素掘溝 45・46・55・56・60～62、溝 100 に切られる一方で、住居 2・9 を切っている。埋土は黒色砂礫土で 1 層のみが認められた。

遺物は埋土からやや古い様相を示す土師器甕片 (図 21-44・45) のほか、布留式期とみられる土師器高坏 (図 21-46) も出土している。一方、遺構の切り合い関係から溝 103 に先行することが明らかな住居 2 の形成時期が布留 1 式期から布留 2 式期であると考えられることから、溝 103 の形成時期についても、その上限は布留 1 式期頃に求めることができよう。

ビット (図 6・7) ビットは、調査区全体で 147 基を検出した。これらのビットについては表 2 ビット一覧表にまとめたので参照されたい。径 30cm 前後を中心に径 20cm～40cm のものが多い。深さは 3cm～48cm までであるが、5cm～25cm のものが多い。147 基のビットのなかには遺物が出土しなかったため、遺物から形成時期を明らかにすることができなかつたものも含まれている。しか

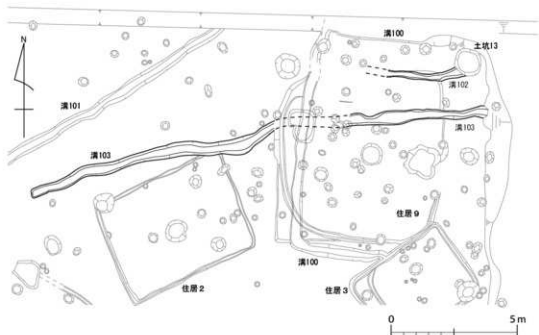


図14 溝102・溝103 平面図 (S. = 1/150)

し、それらの埋土は古墳時代とみられる土器が出土したピットの埋土と共通するものであったことから、当該期の遺構として扱うこととした。

埋土は土質と色調の違いによって1：黒褐色砂質土、2：淡青灰色粘質土、3：灰色砂質土、4：淡灰褐色砂質土、5：暗灰褐色砂質土の5種類に分けることができる。1：黒褐色砂質土を埋土とするピットが最も多く123基検出され、調査区全体に分布していた。その他の埋土のピットはその数が少なく、散見される程度である。ほとんどのピットでは埋土の分層が不可能であって、柱痕を認めることはできなかった。ただし、ピット41については黒褐色砂質土の掘りかた埋土に対して、黒色粘質土として柱痕が認められた。これによれば、柱の直径は16cmである。検出したピットには直線状に並ぶものが見られるが、建物などの配置を復元的に見出すことはできなかった。

④弥生時代の遺構

住居9 (図11・15) 住居9は、調査区東半で検出した竪穴住居である。図3・7・11に見えるように、素掘溝55～57・60～62・65～67、溝100・102・103、掘立柱建物、住居3、土坑13と切り合い関係があり、それらの遺構に切られている。このような攪乱は床面にまで及んでおり、特に住居の北辺部分は損傷が著しい。しかし、検出できた北東隅部分及び南半部分から、住居の平面プランは長方形を呈し、その規模は東西約6m、南北約7mであったと復原できる。住居の南東隅の床面上面には炭化物と炭化木材が認められた。これらは元は建築材であったとみられることから、この住居は焼失住居の可能性が考えられる。ただし、検出した炭化木材には残存状況があまり良くな

く、大きいものでも長さ 38cm、幅 12cm 程の大きさであった。

住居に伴う遺構として土坑 25～27、溝 106、ピット 197～219 を検出した（図 11）。土坑 25 を住居のほぼ中央で、土坑 26 を土坑 25 から西に約 1.5 m 離れた地点で検出した。土坑 25 の規模は長径 88cm、短径 83cm、深さ 15cm、土坑 26 の規模は長径 80cm、短径約 68cm、深さ約 13cm で、いずれも平面は楕円形を呈する。これらの土坑は、埋土から炭化物と焼土が検出されたことから、炉であると考えられる。土坑 27 は、住居の北西部で検出した。検出長径約 1.3 m、短径約 80cm、深さ 20cm で、平面は不整楕円形を呈する。この土坑は性格の不詳な遺構である。

溝 106 は、検出幅 22cm～32cm、深さ 16cm～35cm で、住居の南東隅部と西辺の一部では住居の掘りかたに沿うように掘られており、壁溝のように見える。ただし、図 11 に見えるように南西隅部では住居の掘りかたに沿っておらず、また南辺から北に約 6 m の地点で東に屈曲し、北辺に沿っていない。この南西隅部は、住居の掘りかたと溝 106 に挟まれた三角形の箇所と、溝 106 を挟んでその北東側の住居床面では高低差があり、住居床面の方が約 10cm 低くなっている。一方、北辺周辺の状況は上記の攪乱によって多くは不明であったが、わずかに検出し得た部分を見ると溝の北側と南側では、やはり約 10cm の高低差があり、住居床面が低くなっている。すなわち、現状では「コ」字状に復原できる溝 106 の内側と外側には高低差があり、外側が 1 段高くなっていることが判る。このような状況から溝 106 の南西側と北側は一種の屋内高床部であるとみられ、溝 106 は住居床面を区画する溝であったと考えられる。

次にピットについては、図 11 に見えるようにピット 204 は、ピット 199・200・202 と切り合い関係があり、それらのピットに切られている。そのためピット 204 は住居 9 に先行する遺構である可能性も考えられる。また、それ以外のピットについても、多くはピット 204 と同様の埋土であったので、床面で検出したピットのなかには住居 9 に先行する遺構が存在する可能性もあるが、現状では明確な根拠をもって弁別することはできなかった。

遺物は住居埋土と住居床面直上、住居床面に掘られた土坑 25 から、それぞれ土器が出土した。図 22 に掲げた遺物はそのうちの図化可能であったものである。

住居埋土は上層（図 11 - 3 層）と下層（同 4 層）に分層でき、そのいずれからも土器片が出土した。その量は合わせてコンテナ（40cm×60cm×15cm）にして 1 箱ほどであった。総じて細片であったが、上層出土資料の方が比較的破片が大きく、弥生土器片（47・49・50）と共に古墳時代とみられる須恵器片や 6 世紀代とみられる韓式系土器の平底鉢（48）が確認できた。これらの土器は住居 9 の埋没過程で流入したものであろう。

床面直上では南辺付近で、東西約 3 m、南北約 1.6 m の範囲内に土器が比較的まとまった状態で出土した。図 15 に見えるようにそれらの多くは破片であったが、小型鉢（55）は完形で、小型甕（52）は口縁部の一部を欠損したのみであった。また、大型鉢（58）は後述のように完形にまで接合復元でき、壺口縁部（51）、小型甕（53・54）、小型鉢（56）、有孔鉢底部片（57）は図化可能なほどの

大きさの破片であった。なお小型甕(53)は図上で完形に復元しているが、全体の1/3程度の残存である。このほか、甕体部の破片5片が上記の範囲内に散在していた。

小型甕(52)と小型鉢(55)は上記の範囲内の北東隅付近で、いずれも横位状態で、(52)は口縁が東に向き、(55)は口縁が西に向いた状態で出土した。そのうち(52)は炭化物上面で出土した。大型鉢(58)は5片の破片となっていたが、うち2片は小型甕(52)の北側に隣接しており、残り3片はここから西に約1.2m離れた地点でまとまって出土した。これらを接合するとほぼ完形にまで復元できたのである。

既述の通り住居9は焼失住居と考えられるが、床面直上で出土したこれらの土器に二次的な被熱の痕跡は見られなかった。また、上述のように小片が散在した状態や炭化物の上面で出土するものの存在、離れて出土した破片がほぼ完形に接合復元できる状況から、これらが火災直前の生活家財の使用状況を保っているとは考えにくい。これらの土器は住居焼失後の比較的早い時期に何らかの理由でここに投棄されたものとする。

土坑25の埋土からは土器片12片が出土した。いずれも細片であるが、甕(図22-59)は口縁部付近の約1/5ほどの破片である。

住居床面直上と土坑25から出土した土器が大和第Ⅵ様式に比定できることから、住居9の形成時期は当該期に求められる。

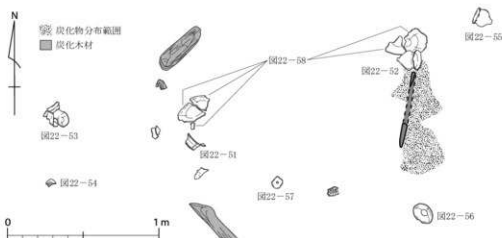


図15 住居9 遺物出土状況図 (S. 1/25)

土器棺墓(図16) 土器棺墓は、調査区中央付近で検出した。墓壙は検出長径76cm、短径72cm、深さ26cmで、平面は正円に近い形状を呈している。墓壙の埋土は灰褐色砂質土で、土器棺内部の埋土は灰色粘質土である。

この墓壙に土器棺として底部付近に2箇所の穿孔がある壺(図23-60)が埋置されていた。底部を下にし、北東方向にやや傾いた状態で置かれていた。墓壙の上部は周辺の地層と共に後世の削平を受けており、検出した墓壙上面と残存する壺の上部がほぼ同位であった。このような土器棺の

置き方からこの壺は胴部から体部中位程まで斜めに削り取られたような状態で、下半のみが墓塚に残存していた。

この土器の内部は検出時には土砂(図16-1層)が充填していた。これを注意深く除去していくと、底部内面から約1~4cmの粘質土の堆積があり、この上面に大小合わせて16片の土器片が検出できた。これらの土器片は折り重なった状態で、壺内の北半に偏っていた。このうち11片は壺と同一個体で接

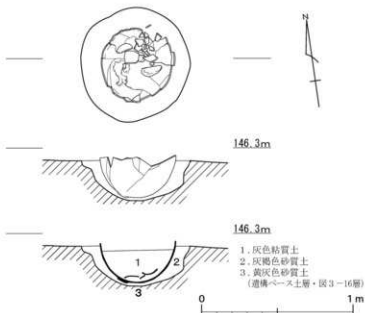


図16 土器棺墓 平面図・立面図・断面図 (S. =1/25)

合が可能であった。結果的に(図23-60)のように、頸部まで接合でき、復原図化できた。残りの5片のうち4片は高坏の口縁部付近の、1片は壺の破片であった。このような遺物の出土状況から、土器棺に対して高坏の坏部が蓋として使用されていた可能性も考えられよう。なお、土器棺の内部には副葬品とみられるその他の遺物は認められなかった。

この壺や高坏は大和第VI-2様式に比定できるものであることから、土器棺墓の形成時期は当該期に求められる。

3. 遺物

第6-1次・2次調査で出土した遺物は、コンテナ(40cm×60cm×15cm)にして20箱ほどである。それらの遺物の中から、図化可能であった土器等59点、石製品1点を図17~23に示した。⁽⁵⁾土器等の詳細は観察表(P43~51)に記したので参照されたい。ここでは概括的に特徴的な事例を述べる。

(1)~(5)は遺物包含層出土土器である。このうち(1)~(3)は弥生土器で、図3-8層暗灰褐色砂礫土から出土したものである。この第8層は第6-2次調査区の北西部に限定的に認められたものである。(1)は広口壺の口頸部片である。口縁端部が下方にやや肥厚している。(2)は壺の体部から底部が残存したもので、分割成形による接合痕が見られる。

(4)・(5)は土器⁽⁶⁾で、第6-1次調査第1トレンチで遺物包含層出土として取り上げた土器である。(4)はB₉形式の高坏である。体部と口縁部の境界を見ると、内面では明瞭な屈曲が見

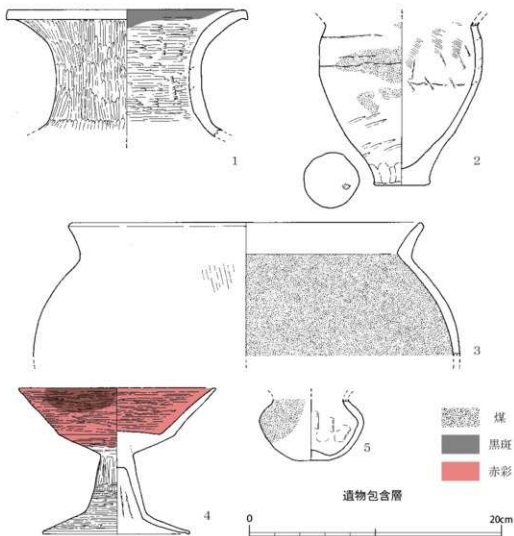


図17 出土遺物1 (S. = 1/3)

られるものの外面ではシャープな稜線が見られない。布留0式期ないしは布留1式期に比定できよう。(5)は口頸部が欠損しているので壺か鉢かは不明であるが、底部は平底ではなく、丸底傾向が強いことから布留式期に求められよう。

以上の遺物包含層出土遺物のうち、第8層出土の(1)～(3)の土器はその特徴から大和第VI⁽⁷⁾様式に求められよう。また、同層出土遺物で図化不可能であった遺物のなかにはタキ調整が見られる土器片が多数出土しており、それらも当該期に位置付けられると考えられる。上記の第6-1次調査第1トレンチで出土した土器は布留式期に位置付けられることから第8層出土遺物より新しい様相を示している。ただし、それらの土器は「第3章調査の成果 ③古墳時代の遺構」で述べたように、住居7・8のいずれかの住居埋土から出土した可能性のあるものである。

(6) は、素掘溝 36 出土の瓦器碗である。口縁端部の形態は碗口縁D⁽⁸⁾である。この碗口縁Dは 12 世紀初頭から 13 世紀後葉にみられる口縁端部の形態である。内面のヘラミガキの隙間が目立ち、口径が 14cm 台であることから 12 世紀中葉以降に求められよう。

(7) は、素掘溝 37 出土の瓦器碗である。口縁端部の形態は碗口縁Eである。高台の形態は高台Dである。碗口縁Eと高台Dはともに 12 世紀後葉以降に一般的にみられる形態であるとされている。当該資料の高台高が 4mm であることから、12 世紀後葉以降の十六面・薬王寺遺跡井戸-20 期の古様相に併行するものとみられる。

(8) ~ (20) は溝 100 出土土器である。そのうち (8) ~ (15) は瓦器碗である。(13) を除いていずれも口縁端部は碗口縁Dである。(13) の口縁端部は碗口縁Cである。底部の形態が判る (8) ~ (10) は、いずれも碗底部Aである。(8) の高台は高台Bで、(9)・(10) の高台は高台Aである。また (8)・(9) の見込み暗文は、残存部分が少ないため特定は難しいが、連結輪状暗文もしくは同心円状暗文であるとみられる。(8)・(10)・(11)・(13) の内面のヘラミガキがやや密であるのに対してそれら以外のものはその隙間が目立つ。(15) を除くとすべて口径が 14cm 台かそれ以下のものである。

(16) ~ (19) は土師皿である。(16)・(17) はいわゆる「て」字状口縁をもつ小形土師皿Aである。10 世紀から 11 世紀後葉までみられるとされる。(18) は大形土師皿C、(19) は大形土師皿Bである。いずれも 12 世紀から 13 世紀中葉までみられるとされる。

(20) は口縁部の幅が広く反した広口A型の土釜である。広口A型は菅原正明氏の型式分類と編年(菅原 1983)によれば大和B1型にあたり、9 世紀から 15 世紀までみられるとされる。

以上の溝 100 出土土器のうち、土師皿や土釜は型式変遷のあまり著しくないため細別時期を特定することは難しい。しかし、瓦器碗をみると、おおむね口径が 14cm 台、口縁端部の形態が碗口縁D、高台の形態が高台Aまたは高台Bである。このような特徴は 12 世紀中葉から後葉に一般的にみられる形態であるとされていることから、瓦器碗は当該期に求められよう。小形土師皿がやや古い様相を示すが、大形土師皿と土釜は瓦器碗と併行する時期であろう。

(21) ~ (33) は住居 1 出土遺物である。(21) ~ (31)・(33) は住居埋土から、(32) は住居床面に掘られた土坑 19 から出土した遺物である。

(21) は広口壺で口縁部から体部まで残存したものである。口頸部には 1 単位 2 本の棒状浮文が 4 箇所に貼り付けられている。頸部には円形浮文と貼り付け突帯がある。さらに口縁端部と棒状浮文、突帯には刻み目が施されている。類例の見当たらない土器である。

(25)・(26)・(28)・(32) は甕の口縁部から体部にかけて残存したものである。口縁端部の形態は、(25)・(26) が g_2 手法で、(28)・(32) が e_2 手法である。 g_2 手法は布留 0 式期から布留 4 式期に認められる形式である。 e_2 手法は庄内 3 式期から布留 1 式期に認められる形式である。体部の形態を見ると (25) は球形化がみられることから布留 1 式期とみられる。